

奥多摩のせし



奥多摩

《第24号》

平成24年1月15日

奥多摩観光協会



画 大澤新次

～ 季節 だより ～

奥多摩・あったかグルメ

おくたま郷土料理「たまものグループ」の中山育ちの望田千恵子さんに「青目立不動尊休み処」でお話を伺いました。

先ず、昨年11月に都内農産物の料理コンクールで最優秀賞をとった料理で「奥多摩ワサビのTOKYO O X(東京産豚肉)巻き」を紹介されました。脇役だったワサビを主役にしたのです。次に、奥多摩産のユズをダイコンで巻いたユズ巻き(酢物)の作り方を教わりました…とてもおいしいと。

寒い時の温かい食べ物は、地元の畑でとれたものを使って、のしこみうどん、だんご汁などを小麦粉から作ります。例えば、のしこみうどんの作り方。…煮干でだしをとり、味噌や醤油で味付けし、ダイコン、サトイモ、ニンジン、ゴマ、油揚げ、ネギ等を入れ予め煮てから、手作りうどんを入れて煮込む。囲炉裏で煮る場合はゴトクを置いて大鍋をのせます。その他、味噌味にしたけんちゃん汁もよく食べます。

おやつは小昼飯(こじゅうはん)と言い、ゆで饅頭、おやき、たらしもち、甘酒も、もちろん手作りです。保

存食として、干し柿、干し芋、干しナス・芋ガラの油炒め、干葉(ひば)で作る粕汁などがあります。

大晦日には必ず三日分のそばを打ち、つゆも作っておきます。雑煮を出してそばを出したり、おつゆを出したり。おしるこは、小豆から煮て餡子にして固めておき、薄めながら作ります。

コンニャクも手作りで、水を多く入れて作ったのが刺身コンニャク、少ないものが生コンニャクで煮物用です。

お話を伺っているうちにお腹が空いてきて、お昼時となっていました。早速、教わった料理を味わうこととなりました。「そばセット」には、そば、山菜5種入り炊き込みご飯、ダイコンのユズ巻き、昆布の煮物、隼人瓜のバリバリ漬け、とってもおいしくいただきました。それに、遠くに奥多摩の山並み、眼下に奥多摩湖が一望できて大満足でした。

奥多摩では、今でも、季節ごとの料理が作られています。

奥多摩郷土料理のつくり方「たまもの」についてのお問い合わせは、「ふれあい農園(海沢)」にお願いします。
(聞き手:浜野雅子、武田和代)

～ 旅 さ っ せ え ～

奥多摩山里歩き

～倉沢・日原地区～

コース:

開催日:平成23年2月1日(水)

八潮書店が発刊した「多摩の山と水」に、大沢地区について、次のような文章が載っています。私の好きな部分を抜粋してみました。

『大沢はその名の如く、日原川の大沢の中にある。水面を去ることあまり速くはなく、いわば薬研の底のようなところであるけれども、東南面せる斜面であるから、割合に日当りはよい。人家はなにぶん大沢の中であるから、相当に急峻な斜面を幾段にも切り開いて僅かばかりの平地を作り、そこに建ててあるので、前の家の屋根と後の家の土台石とが相接する位込み合っている。雞壇式などといえば立派なようであるけれども、ここはまるで梯子段式とでもいいたい位である。その代り、どの家も見晴しはよい。(中略)

前の家の屋根を隔てて下方に日原川の流れを望み、流れの彼方には 峨々たる高山を眺め、その高山の上には獅子の吠えたったような大岩が両々相対

して屹立しているのが見られる。おまけにそこ、ここには季の花が盛に開いてあって、ちょうど山水の絵をひろげたようである。』

以上は、大正 15 年5月に訪れた高橋源一郎氏の文章(原文は旧仮名遣い)ですから、現在とは多少違っていますが、良く大沢を表していると思います。今でも集落の人が「寄ってらっせーよ。」、「ふんごまっせーよ。」と迎えてくれるかもしれません。

振り返れば大岳山が展望でき、健脚の人なら加藍神社から山の神尾根を経て狩倉山へも登れます。

大沢から白妙橋に向うと、日原川に2分で降りられる場所があったり、フリークライミングやボルダリングを行っている人たちが居たりと、飽きることのない地域です。

川苔林道から百尋の滝までも私の好きなコースで、春は咲き誇る花(ツツジやヤマザクラ)、夏は水遊び、秋は紅葉、冬は湧水がツララとなり、そのツララでオンザロックと、何かと楽しめるコースです。ぜひ一度大沢にお出てください。

(大野邦雄)

～ 行 っ て 旅 た め っ ～

奥多摩三山【大岳山】

春5月に「大岳山に登ろう」に行ってきました。大岳山は奥多摩三山(御前山、三頭山、大岳山)の一つで、二百名山にも選ばれている人気の山です。また、地元では西の方向にあるキューピー山として親しまれています。

御岳山から大岳山、鋸山を登り奥多摩駅に向かうコース(約6時間)。下見の時は雨模様でしたが、本番では晴天で良かったです。雨だと岩場があり滑るので危険です。

ケーブルカーで御岳平(831m)まで上がってから登山のはじまり。眺めは抜群でスカイツリーも見える時もあるそう。山上の御師集落の歴史を感じながら歩き、神社直下脇をぬけて長尾平。一息入れて、新緑を楽しみながら尾根歩き。介場峠の急坂を登り、慎重に岩を巻く鎖場をクリアしていくと大岳神社に着きました。伝説のおいぬさまに安全登山を祈願し、急登を頑張って登ると大岳山(1267m)に到着しました。速くに富士山がうすく見え歓声が聞こ

えました。ここで昼食をとり鋸山、奥多摩に向けて歩き出しました。いきなりの急下りを用意しながら歩く。鋸山付近では、シロヤシオトウゴクミツバツツジ・ヤマツツジが咲き、楽しませてくれました。その先、一枚岩の鎖場の難所を通過して烏天狗が出迎えてくれました。ここで一休みしてから注意深く下山していきます。鎖場近くでは、岩場で咲くイワカガミやツクバネウツギ、ツクバネが見られてとても癒されました。そして徐々に山道を下って、愛宕神社の横を通り、昭和橋を渡り、奥氷川神社、奥多摩駅に到着しました。

登山コースはこの他に、五日市の養沢、馬頭刈尾根からのコースがあります。夏は深緑、秋は紅葉に染まり、そして第 24 号が発行される冬は木々が葉を落として、奥多摩の山並みが望めるポピュラーな山です。山は遠い昔、修験の山で一般の人が登るようになったのは明治時代になってからだと聞いています。現代では老若男女で賑わっています。

(武田和代)

～ 奥多摩「山岳救助隊日誌」抄 その22 ～

「山 ガールよ」

3月11日、東日本を襲った 未曾有の大地震、大津波、そして原発事故。あれを機に日本の土台が緩み、日本人の精神状態にも大きな影響を及ぼしているような気がする。歯車の狂ったような政治や経済、遅々として進まぬ被災地の復旧、復興。少なからず私の精神状態も何らかの影響を受けているし、この地球上で天変地異が進んでいるような気がしてならない。日本では、ゲリラ豪雨などの新語まで生まれた異常気象。福島や新潟地方を襲った水害。日本を直撃して全土に被害をもたらした台風12号、15号による川の氾濫、土砂災害、全くこれでもか、これでもかと全土に試練を与えている。いや日本だけでなく、世界各地で地震は起こっているが特にトルコで起こった大地震、人為的なアラブ諸国の争乱。アメリカの竜巻、巨大ハリケーン。そしていま、タイを襲った大規模な河川の氾濫など、直接自分に降りかかった災害ではないにしても、それらの人たちのことを考えると心が痛み、泣いたり怒ったりと精神状態がぶれるのだ。いつも穏やかな気持ちで暮らしたいと思っただけでも、人間はそうはいかないものだと、つくづく考えさせられる。

それでも登山界は山ガールの出現で華やかになってきた。中高年登山最盛期の中で4、5年前から突如として現われた山ガールと呼ばれる若い女性登山者。何が発端だったのだろう。富士登山ブームや高尾山のミシュラン効果。〈山と溪谷社〉などが主催した「瀬沢フェスティバル」なども影響したものだろうか。

このブームにあやかり、各登山用具専門店などでは山ガールコーナーを特別に設けるなどして、カラフルな衣装や装備を展示している。また山ガールに関する本やファッション誌の出版などもブームに拍車を掛けている。

この秋の青梅線の電車も山ガールが俄然多くなった。縞々のタイツに山スカと呼ばれるスカート履き、薄手のピンクや紫などのダウンを着込み、可愛い帽子などをかぶり、ストックを差したザックを背負ってと、若くて服装がおしゃれだから目立つこともあるのだろうが、増えてきていることは確かだ。

そして山ガールは生き生きとして、御嶽や奥多摩の駅に降り立つ。学習意欲も高い。先日御岳山ビジターセンターなどが主催して「山ガ

ールのための登山養成講座」を何回かに分けて、ステップアップ形式で実施し、大勢の山ガールが参加して、講義や実技指導を受けた。最終日に大岳山に登り縦走して奥多摩に降りてきた。奥多摩ビジターセンターにおいて私が奥多摩の山での遭難事例や注意すべきことなどを話させてもらった。みんな真剣に聞いていた。山を愛する者として、山ガールブームを歓迎したい。

帽子から登山靴まで真新しい山ガールスタイルに、真新しいザックを背負った女の子が2、3人で奥多摩駅前を行ったり来たりして、「奥多摩むかしみち」の入口などを交番に聞きに来る姿などを見るとほほえましくもなるが、そのまま山に入られるとハラハラものである。

山ガールの遭難事故も増えてはいるが、幸い奥多摩では重大事故は起きていない。重大になる前にケータイで救助要請するからであろう。

ここにハラハラ山ガールの救助要請の事例を2件ほど紹介しよう。

昨年9月21日午後9時ころ、雲取山に登った山ガール2人から「道に迷った」と、携帯電話で青梅警察署に救助要請が入った。青梅警察署員が、遭難者の位置をGPS機能で確認するため、110番通報するように指示した。ところが遭難者が110番通報すると、それが山梨県警の上野原警察署で認知したのであった。

遭難場所は山梨県警管内と判明したが、都県境であることから高田副隊長が若手隊員を招集し救助に向かった。場所は鴨沢からノボリ尾根を少し登り上げた辺りである。佐藤隊員は親しい山梨県警上野原署小菅駐在所の下山隊員と2人、先行して入山した。小袖乗越から登山道に入り、要所要所で声を張り上げて登って行ったが、小袖集落の灯が見えなくなった辺りで声を上げたら、左上の方から小さく応答があった。登山道を離れて杉林の中に入り尾根の高みを目指して登って行く。だんだん声も大きく聞えだした。尾根の一番高い所にヘッドランプの明りが2つ見えた。登っていくと急な登りの手前で、山ガールHさん(23歳)とKさん(23歳)の2人が待っていた。

ケガの有無を聞くと2人ともケガはないと言う。道迷いの状況を聞くと、2人は奥多摩からバスで午後5時ころ鴨沢に着き、そこから登り出した。小袖乗越から小袖集落方向に100メートルほど車道を行った所の左脇の階段がノボリ尾根の登山口で、尾根東斜面の中腹に登山道

は付いているのだが、2人は小袖乗越の尾根の末端から、尾根の一番高いところの踏み跡を辿ったものである。しばらく登ると踏み跡も不鮮明になり、ヘッドランプの明りで探しながら登ったが全く分からなくなってしまった。3時間もさまよったあげく、斜面も急になったので、登山計画書に書いた青梅警察署の電話番号にケータイで救助要請したものであった。

後続隊も到着したので、介添えしながら登山道に下った。下山しながら、なぜ暗くなるころから雲取山に登り始めたのかを聞いた。理由はこうである。2人はこの夏、人気の富士登山に行った。5合目を夜に発って、夜明け前に日本の富士山頂に着きご来光を仰いだ。2人はすっかり感動し山にハマってしまった。そして今度は東京で一番高い雲取山でご来光を見ようと計画したものであった。3776メートルの富士山を登ったのだから、2017メートルの雲取山なんかはちょろいものと思ったという。オイオイ待ってくれよ。夏の富士山は行列の後に付いて行けば、時間はかかるが山頂には辿り着く。奥多摩辺りの山は、いま夜に登る人などほとんどいない。「夜行性のクマにでも遭ったらどうするつもりだ」と少し脅かしておいた。

「初心者2人だけの登山は危険が伴う。山岳会に入るか、登山教室などで勉強する。」「ガイド登山に参加するか、ベテランに連れて行ってもらうなど経験を積む。」「そんなに急がなくても山は逃げないから、ゆっくりやればいい。」と指導しながら、午後11時14分、小袖乗越に下山した。ここで山ガールよ、登山計画書を出して来たことと、青梅署の電話番号を覚えていたことは褒めてよい。

今年4月16日午前10時47分、「山で道迷い」の110番通報があった。場所は上成木から棒ノ折山の黒山に登る途中だという。遭難者の携帯電話の番号を聞いて掛けてみる。山ガールらしい若い女性の声が出た。上成木バス停から黒山に向かったのだが、1時間ほど登って道に迷い、踏み跡もなくなり、急斜面に出たのでケータイで救助要請したとのことである。迷っているのはOさん(34歳)、Iさん(28歳)の女性2人である。概ね場所が確定できたので、これから向かうから、そこを動かないよう指示し、声が聞えたら返事をするようにと言って電話を切った。交番には高田副隊長と橋本小隊長、それと私の3人がいた。大した救助でもないのに3人で向うことにした。

山岳救助車で成木川上流沿いの舗装された林道を終点まで行き、さらに崩れかけた林道を尾

根まで車で入った。そこは馬乗馬場と呼ばれ、黒山まで20分ほどの所である。この尾根は上成木の小沢峠から黒山まで約2時間の距離なので、ここより下、小沢峠側で迷っていると思われる。大声で呼びながら下って行った。

警視庁通信指令本部が奥多摩交番を呼び出している。またしても山岳遭難事故である。場所は日原街道の大沢バス停から908メートルの地点という。6人パーティの60歳代の女性が岩場から約8メートル転落し、意識がないと言う。重大事故になりそうだが、この捜索を放っていくことはできない。消防も出るだろうから残っている人達で行ってもらおうほかはない。

佐藤隊員からケータイがあり「大沢から908メートルの地点てどのあたりですかね」と言う。「地図がないから分からない。山ノ神尾根かその付近ではないか。いま捜索中だから転落はそっちで対応してくれ」といって電話を切った。ところどころで大声で呼びかけ、電話で連絡を取りながら40分ほど下った所で応答があった。急斜面の沢に降りて探す。また声が聞えなくなる。尾根をひとつ回り込んだだけで、声が聞えたり聞えなかったりする。

岩場を回り込み大声を上げると、すぐ上から応答があった。急斜面で進退窮まった2人を発見した。介添えをし尾根まで登り上げた。私が山ガール2人を小沢峠まで連れて降り、高田副隊長と橋本小隊長は車まで戻り、回り込んで小沢峠まで迎えに来てもらうことにした。2人を連れて登山道を下っていると、小さな岩場のギャップまで来て「あっ、ここを左の方に入って行った」という。そこにも踏み跡らしいものはあるが、太い木で通せんぼしてある。「これは入っていけない印なんだよ」と言う。「ああそうなんですか」と山ガール。「山は非日常の世界だから、それなりの勉強と経験が必要なんだよ」と教示しながら午後2時40分、小沢峠まで下った。

別件の転落事故は、狩倉山の山ノ神尾根から派生する日蔭指尾根で、岩場を登っていた60代の女性が掴んだ枯れ枝が折れ、約8メートル転落したもので、ヘリで運んだが死亡したという。中高年が亡くなり、山ガールは助かった。山ガールには、もっともっと勉強し、経験を積んで長く山を楽しんでほしいと思う。

客は寝て 小屋に星降る 夜長かな

(青梅警察署囑託員 山岳指導員 金 邦夫)

奥多摩昔語り

奥多摩の地名(24)

奥多摩町の西のはずれにある留浦(とずら)は、多摩川沿いの本村と峰谷川沿いに広がる地域です。本村に名主がいて、峰谷の峰分3組(峰・奥・下り)の峰にも名主と同じ「おまえ」と呼ばれる家がありました。

留浦とは、葛(くず)が、からまり、とじる様子をいい、留浦の「ら」は、ひら、めんのことで、葛が一面に繁茂している場所に付けられています。

留浦地内を流れる多摩川にエブチという入江の体をなした深淵がありました。村内に寄合いがあると、そこへ行って「膳椀をお貸し下され。」という、いつしか岸に揃えて置いてくれましたが、後には、どうした訳か、「お貸し下され。」と頼んでも、出してくれなくなったということです。

江戸時代の初め頃、山の中腹に祀られている蔵王権現の境内に、井戸を掘ることになり、村中の者が掘

り進めていると鉄の籠子(やかん)が出てきて、中から3寸程の不動明王の木像が現れ、永楽銭の結束も入っていたといひます。

この話が、どこでどう変わったのか、「むかし、木船(貴船)大明神の境内に、清水の湧き出している所があり、村中でそこへ井戸を掘ることになりました。村人が3尺程掘下げた時、小さな茶釜が出てきて、水はこの中から湧き出しているのです。不思議に思って茶釜を土の中から取り出したとたん、いままで、こんこんと湧き出していた水が、びたりと止まってしまう、それ以来、一滴の水も出なくなったということです。」と伝わっています。

この茶釜は、いまも貴船神社に保存されているといわれています。

【資料】 奥多摩町誌、広報おくたま

(岡部義重)

奥多摩歳時記

炭焼きの話

現在、奥多摩町内で、生業としての炭焼きは行われていませんが、間伐材や流木などの廢材を炭に焼く仕事は、2,3か所で行われています。

炭焼きは、体力のいる仕事ですが、一定の収入を計算出来るため、苦勞のし甲斐がありました。山主から原木となる雑木山を買取り、木を集めやすい場所を選んで、竈(かま)を築(つき)ます。山をやや上り勾配に掘りこみ、石積みをして部屋をつくり、奥の石積みの後に下から煙がでるように煙突の穴を開けます。奥の石積みの下部に開ける穴は、火が原木の上側を燃えながら進み、奥の石積みから下へおりて、穴をくぐって煙突へ出るように、クドバリという煙がくぐりやすい工夫がされています。

天井は、柱木をたてて木や枝でドーム型にした上に平たい石や竈土(粘り気のある山土)をのせ、水を撒いて湿らせてから叩いて固めます。

天井を造る時の木製品は、初竈の前に柱木とともに引出してしまいます。

入口は、人が腰をかがめて出入りできる広さになっていて、ここから原木の雑木を入れ、奥から順に立

ててきて竈が一杯になったら、火を点けて入口をふさぎます。3,4日後、白煙が青煙さらに透明に変わった時、入口の空気穴や煙突の穴をふさぎ、次は、4,5日後、炭を取出します。これが、黒炭を焼く行程となります。

白炭は、煙が出なくなった真っ赤な熾(おき)を長い鉄製のかきだし道具(エブリ)でかきだし、ゴバイ(灰)をかけて消す方法です。白炭

は、熾がとぼってしまうため、量が減り、1竈で5俵位(1俵は、4貫目(15kg))が出来ました。黒炭は、25~30俵になりました。

奥多摩地方では、江戸時代から炭焼きが行われた記録がありますが、主に白炭が生産されました。黒炭は、明治時代になってから焼かれました。

【資料】 奥多摩町誌、他聞き書き (岡部義重)



ガイドだより

『石積み』～石工のよもやま話～

今回、石積み(石垣作り)の名人、ガイドの仲間・清水梅夫さんの話を聞く機会を得たので、その話の一部を紹介します。同じく石工(いしく)であったお父様が築かれた石積みが残る岫沢(くさざわ)の旧吉野家の屋敷跡で話を伺いました。

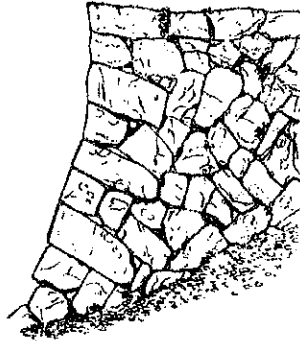
* * *

《綺麗な石積みですね。お城の石垣みたいです。》

上部に向かって湾曲している形から、「忍び返し」と呼ばれているけど、この積み方の目的は、根石(最下部の積み石)に全ての重量がかかることを避ける意味もあるそうだよ。

《大小の石が使われていますね。》

ここで使われている石は、この地で採れる「岫沢御影(みかげ、花崗岩石材の総称)」なんだよね。自然石を使う場合は、なかなか大きさを揃えることが難しいので、こうして、大小の石をうまく組み合わせるんだよ。ブロックや、大きさを揃えてある間知石を積むのと違い、石工の腕が物を言うんだよね。



でも、どうしても割る必要が出てくるので、ここの石積みも割り石が多く使われているよ。この積み方を乱積みって言うね。

《石積みの角の積み石は大きいですね。》

この場所をスマ(角の意味か)と言い、そこに使われる石を「スマ石」と言うんだよね。ここには、力(内部からの圧力)がかかりやすいので、大きめな石を使っているよ。

スマ石、根石及び天端(てんば)石には、特別な形状が求められるため、石工は、集めた石の中から、それぞれにふさわしい石を見つけた場合は、ハネておくんだよ。そして、必要に応じてそれを使う。

《同じ大きさの石を使っている石積みもありますね。》

同じ自然石であっても、同じ大きさの石を揃えたり、割って大きさを揃えれば、綺麗だけでなく堅牢に積める。積み石同士の接触面を目地(めじ)というが、その目地が縦に通っていたり、横に通っていると、弱い石積みとなる。それを避けるために、石の積み方に工夫がしてある。

《谷積みとか言う積み方がそれですか?》

そう。石を並べていく際に出来る凹みを谷と呼び、次の段を積むときに、その谷に置いていくので「谷積み」と呼ぶ。そうして出来上がった石積みでは、ひとつの石が周りの6個の石と影響し合うんだよね。結果として、積み石が抜けにくい石積みができる。最近はずぐにコンクリートで固めてしまうから、石積みの技術の妙も何もなくなっただけだね。まあ、つまらなくなっただよね。(語り手:清水梅夫、聞き手及びまとめ:堀越弘司)

イベント案内

奥多摩町と観光協会では、冬から春に向けてイベントを用意しております。「名人・達人観光ガイドの会」のガイドがご案内します。

希望者は、往復はがきに参加したいイベント名・住所・氏名・年齢・電話番号(2名様まで)を明記の上、奥多摩観光協会へ。(抽選の場合あり)

① 山里歩きシリーズ

* 2月15日(水) 峰谷、原(雲風呂)地区

応募締切日 2月1日(ハイキング)

* 2月22日(水) 留浦地区

応募締切日 2月10日(ハイキング)

* 3月1日(木) 川野地区

応募締切日 2月15日(ハイキング)

② 2月28日(金) 雪の黒川鶏冠山を歩こう

応募締切日 2月10日(登山)

③ 3月27日(火) 海沢のカタクリと史跡探訪

応募締切日 3月6日(ハイキング)

募集人員:各回30名

参加費:700円(②のみ3,000円)

次号発行予定:平成24年4月15日

【編集後記】

残念というか悔しいと言うか。でも、大切なご報告をしなければいけません。長らく当観光協会の事務局長を務められてきた渡辺幸治さんが、年度途中で退任されました。今後、新たな活躍の場を得られることを願うばかりです。

発行:奥多摩観光協会

住所 〒198-0212 奥多摩町 氷川 210

電話 0428-83-2152 Fax 0428-83-2789

編集:名人・達人観光ガイドの会